アデルペルガ，小ロンゴバルド王国の女王

楠　田　直　樹

はじめに—パオロ・ディアコノとの出会いと当時の情況

前々回，前回とアデルペルガについて論述してきましたが，本稿ではベネヴェントに移動してから，アレーキ2世と結婚したあとの彼女の生き様について論述していくことを主眼に置きながら，考えてみたいと思います。

題名に使用した「小ロンゴバルド王国」とは，いわゆる北イタリア，現在のロンバルディア州を中心とした地域に築いていたロンゴバルド王国とは異なり，南イタリア，現在のカンパーニア州を中心とした地域に築かれた，ロンゴバルド王国の血筋を引くとされる王国，ベネヴェント公国のことを指しています。因みに，この場合北イタリアで形成された王国を「大ロンゴバルド王国」と呼称し，一応の区別をしています。

いずれにしても，歴史上はゲルマン民族大移動の時期にあたり，ローマ帝国没落後の混沌とした状態にヨーロッパ社会があったということを念頭に入れておくことは当然のことですが，その中でもローマ帝国の中心としてのイタリア半島はさまざまな民族が侵入，闖入してくる状況にあったということは止むべからざる情況だったのではないでしょうか。その地がその当時の「世界」の中心として見られていたからです。ローマ帝国後の秩序をどのように回復していくのかがヨーロッパ各地で見定められようとしていた時期です。人身掌握術に

長けた為政者，あるいは行政組織がどう出現するのかを庶民は待ち望んできたのかもしれません。

このような社会情況の中で，アデルペルガはどのようにアレーキ2世の統治に貢献していたのかを根底に置きながら，考えてみたいと思います。前稿でもベネヴェント時代の初期について，その一部を述べてきましたが，その中で当初はかなりの文化の違いにカルチャー・ショックにも似たノスタルジアを大ロンゴバルド王国時代に持っていたことを述べてきました。それから，彼女はどのように気持ちを切り替え，南イタリアでの生活に適応していったのか，家族との別離の中でどのように自立していったのか，といったことを推敲していきたいと考えています。もっとも彼女を支えたのは，幼少期から蓄えてきた教養の程度に大きな鍵が隠されている可能性があります。その一例が当時の文化人の中でも高名だったパオロ・ディアコノとの出会いでした。彼の教えは，彼女の中でしっかりと根を下ろし，不毛の南イタリアにロンゴバルドの文化を根づかせていきました。

そんな中で，彼女に悲惨な出来事が届き，このパオロ・ディアコノとの関係にひびが入ってきました。それは，北イタリアでの出来事です。フリウリ地方での内紛です。シャルルマーニュはロンゴバルドの諸族長にそれなりの信頼をしており，伝統を保持することに寛大でした。それをいいことにしたのではないでしようが，ラッツィスとアストルフォとの間で，それは勃発してきました。その内紛はフリウリ地方だけでなく，近隣のヴェネト地方にも大きな影響を与えていきました。それは775年から776年にかけて，デジデーリオの子息アデルキ，フリウリの公爵ラドグァートそしてベネヴェントのアレーキ，スポレートのイルデブランドの間で主導権争いへと拡大していきました。そのさいに，パオロ・ディアコノの息子アリキスも，ベネヴェント公国の助けを借りながら，チヴィダーレのジグァルドとともにその渦中にいました。そしてフリウリ，トレヴィーゾやヴィチェンツァの他の公爵たちもその中におり，フランク王国から自由自立を享受する方向で結合していきました。しかし，それは先見の明のある戦いであるとは考えられません。当然，シャルルマーニュ側からは寛大さ

よりも厳罰性が見えてくるようになりました。フリウリの貴族たちは弾圧され，アリキスも捕えられ，捕虜としてフランスに連行されてしまいました。

このような情況がイタリア北東部で起こっていました。パオロ・ディアコノは，その不運と苦悩の中で，モンテカッシーノに避難し，そこで僧職に就き，彼の学生であったアデルペルガとの別離に，情況の厳しさを見て取っていました。アデルペルガだけでなく，彼女の関係者，すなわちロンゴバルド族の救世主と見做されていたアレーキ２世や彼らの子息たち（ロムアルドRomualdo，グリモアルドGrimoaldo，アデルジーザAdelgisa，テオデラーダTeoderada，そしてアラヒスAlahis）に愛情を注ぎ込み，さまざまな学問を授けてきましたし，アデルペルガ自身にも彼の指導や支援を欠かすことのなかった生活[1]から離れる辛さを身をもって経験することになりました。彼の唯一の慰めは，ここで僧職に入り，王国の没落とともに繁栄の落日を見つめていた老王ラッツィスとの出会いでした。こんな中で，パオロ・ディアコノは，彼の傑作であるだけでなく，中世ラテン世界の主要作品にもなった『ロンゴバルド史Historia Langobardorum』を書き上げ，人々のあらゆる声を吸収していくことに奮闘していました。

いずれにしても，彼が南イタリアから出発してからのち，ベネヴェント公国は，シャルルマーニュやアドリアーノ１世と対立しながらも，ロンゴバルドの系統の再生と修復に砕心しました。例えば，アレーキ２世は高品質な貨幣鋳造[2]に至るまで，自主独立の精神を体現していました。そんな彼の気持ちの中に，地中海沿岸地域への伸張が芽生え，その白羽の矢が地理的にも以前から関心を寄せていたサレルノへの関心になって出てきました。その関心がこの時期に大きくなってきたのも事実です。以前から，彼はアデルペルガとともに，よくサレルノにやってきていました。そしてその町の東西に位置する海岸線に魅せられていきました。いずれにしても，アデルペルガにとっては，その海岸線はシルミオーネで過ごした幼少期からのエデンの園にも似た心休まる場所にも似ていたことは容易に理解できます[3]。その海岸線に彼女が学んでいたウェルギリウス風の何かを見ていたことも考えられます。その神秘的で風光明媚な岬や運

命の地へとアエネイスが探訪の旅を行なっていた中の情況を想起させるような海岸線に張り出した岩場はそれを彷彿とさせるものでした。この古典的な幻想と彼女の中に去来した記憶との往来は，彼女の心の中にサレルノという土地に特殊な感覚を与えていくことになりました。そうこうするうちに，774年に，疫病の流行からこの地に居住地を移動することになりました。

サレルノは，635年までビザンツ帝国の中にとどまっていましたが，平穏なうちにロンゴバルドの支配下に入っていきました。それは僧職にあったガウディオーゾGaudiosoの振る舞いによるところが大きく，奇跡的にもサレルノの人々とサムニウムの人々との間の平穏なうちの出会いが設定されていました。いずれにしても，サレルノは人口の面でも勢力の面でもかなわなかったので，ベネヴェントのロンゴバルドの勢力に従わざるをえなかったというのが現実だったのでしょう。ベネヴェントの勢いは，その後ノチェーラやロータにまで伸張していきました。そこでナポリの勢力と直面することになりました。ナポリを越えることはできなかった（595－641年）ので，サレルノ獲得で海への出口を得たことに満足することにとどまりました。当初はサレルノを獲得しただけで，その地の開発はアレーキ２世の事業を待たなければなりませんでした[4)]。この流れの中で，ベネヴェントに聖ソフィア寺院が建立され，サレルノにも華美壮麗な建物を建立請願していました。これこそがビザンツ皇帝ユスティニアヌスの模倣にほかなりませんでした。

以下当稿では，このような当時の情況を念頭に置きながら，アデルペルガの政治的社会的な立場，そしてベネヴェント公国，すなわち小ロンゴバルド王国での役割を考えてみたいと思います。

１．小ロンゴバルド王国の救世主アレーキ

アレーキは，780年にナポリとビザンツとの同盟を強化する一方で，シャルルマーニュからローマ・カトリック教会に奉献されていたテッラチーナを占領しました。そして781年には，サレルノを強固な要塞にしたのち，ナポリ公国やアマルフィ人と再び事を構えるようになりました。その頃，従弟のアデルキ

は，彼との連絡を密にしながら，父の玉座を回復しようと機を覗っていました。

そんな中，アドリアーノ［ハドリアヌス］１世は声高に，二つのロンゴバルド国家に脅威を感じつつ，サクソン族やブルターニュ人に対する戦いで勝利を収めていたシャルルマーニュが786年にアレーキに対する軍事遠征を計画し，厳冬の中アルプスを越えてきたことに注目していました。彼は意識的にローマに逗留しました。そこで，彼はアレーキの長子ロムアルドと邂逅しました。長子は非常に知的で，繊細な教養をもつ青年で，たくさんの贈物を携えてきました。しかし，教皇やその取り巻き連中，フランク族の長たちは，一度アレーキに対峙していた軍団派遣員たちの方へそれをもって行くように促しました。それで，ロムアルドはその雰囲気を感じ取りつつ，家族全員や廷臣たちを引き連れてサレルノで身を守るべく，赴いていきました。そしてナポリ人と和平を結び，リブリア地方[6]を譲渡しました。しかし，シャルルマーニュは行軍中，カプアの蜂起団によって捕えられ，その地を放棄せざるをえなくなりました。他方，アレーキは急いで，カプアに長子ロムアルドを派遣しました。長子が第二子グリモアルドに取って代わり，人質補囚中のシャルルマーニュとすぐに和平交渉に入りました。シャルルマーニュは，グリモアルドと廷臣12名を連れ帰ることでその交渉を受諾しました。この地域の覇者であるアレーキが忠誠心をもつことを，ロムアルドを通して誓約させると，フランスへの帰途につき，捕虜を彼とともに南フランスのエクスに連れて行きました。こう考えてくると，次の二つのことがその理由として挙げられます。一点目として，シャルルマーニュにとっては，この南イタリアの地域はまだ彼の王国の中で主要な地域には入っていなかったということがはっきりしてきます。そして二点目には，教皇アドリアーノ１世の権力が過度に強力にならないためにその対抗措置としての南イタリアの勢力に注目していたのではないかとも考えられます。このように，南イタリアが当時の地中海世界の中でどのような価値をもっていたのかが明白になると思います。古代において，ギリシア人が植民して築いてきたマグナ・グラエキアの繁栄を考えれば，隔世の感があります。古代末期からその地の歴史的な地位は大きく変化したことを示しているといっても過言ではありませ

ん。

アレーキはここでもまた，その人民を救い，そしてサレルノの成育事業を継続することができました。彼はベネヴェントの王として称号をもちながらも，サレルノを自らの拠点として望んでいました。それには以下のような理由が考えられます。サレルノは長らくビザンツ領に留まっており，さらにはその地理的な位置に恵まれており，なおかつ古典的な伝統に忠実な地域で，ユスティニアヌス帝の栄誉を称える王国のためには全く適した場所であったと思われます[7)]。その歴史的地理的な条件，そのうえにサレルノの風土から醸成されてきた人間的性格の基盤が大きな影響を与えていたことは不思議なことではありません。その地理的条件の中には，当然ながら，サレルノの港が当時のプーリア地方の港に比べて戦略的に重要で有利であったということも含まれています。

さて，パオロ・ディアコノのフランスからの帰還がシャルルマーニュとアレーキとの和平行動に少なからず影響を与えていたのではないかと考える節もあります。彼は，782年に，シャルルマーニュに頌詩を残しています。その直後，個人的にフランスに赴き，フランス宮廷で熱烈に歓迎を受けました。ここですぐに，文化活動の一翼を担うようになりました。そしてヨーク出身の高潔なアルクィーノを除いて，当時の優れた作家の一人として有名になりました。フランスで著述した作品の中に，彼の名を不動のものにした『業績録』が含まれています。こうしたディアコノの動きがシャルルマーニュとアレーキとの関係に多大な影響を及ぼしていたと考えられます。786年にディアコノがフランスから帰還することで和平への話が急速に進展を見たのではないか，という穿った見方もあります。しかしながら，そこにはグリモアルドを引き渡すという条件があり，そのことがアレーキをロンゴバルドと結びつけるアデルペルガにどのような犠牲を強いたのでしょうか。ただ，この点ははっきりとはしていません。

もしも『サレルノ年代記』に出てくる二人の邂逅の対話がこの機会に適合するものであるならば，アデルペルガの振る舞いは巧みなものとして出てきます[8)]。それは以下のような文言です。すなわち，「パオロは今は亡き故人の娘のもとに戻ってきて，謙遜しながら語って平伏した。『汝の最も敬虔な両親から取り

上げられたが，主は私を息子たちから取り上げなかった…この言葉に最愛の女王は感涙した』」とあります。恐らく，シャルルマーニュがロンゴバルド王国を侵略すると公言したことは，ベネヴェントの王族とともにディアコノの周知の緻密さからだけではなく，フランク王国の使節団がアレーキの精神的な才能，素晴らしい友好関係力，彼の従者たちの華美壮麗さ，人物としての栄誉に言及しながら，驚愕天地の知らせから左右されるものでした[9)]。その一方，確かにその壮麗な大理石をふんだんに使用した宮廷にも幻惑されていたのでしょう。そのさまざまに華美装飾された部屋から部屋を通りながら，玉座にまで達していきました。そこは王と王妃の寝室をも兼備したものでした[10)]。さらには，『サレルノ年代記』に，その宮殿の地下で金の偶像が発見され，その偶像とディアコノの文節が側壁を装飾していたと続けています[11)]。

787年7月21日，知勇兼備のロムアルドは，シャルルマーニュに人質捕囚されていた弟グリモアルドに支えられていたのですが，体調を崩し亡くなりました。その年の8月26日にはアレーキが急逝しました。アレーキの亡骸は，きれいに洗われ，香しき匂いを施され，壮麗に整えられ，聖マリア・ジェニトリーチェに奉納されたサレルノの聖堂の真紅色に美しく装われた棺台に収められました。その葬送に当たっては，ベネヴェント，カプア，サレルノの領土から小ロンゴバルドの代表者たちはその高貴な亡骸を丁重に敬いにやってきました。しかしながら，イタリア半島のさまざまな地域からもその葬送のためにやってきました。また，敵方ですら，その偉大さに敬意を表しており，その時代の偉大な人物のうちでも第一位に置かれる人物だと見做されていました。また，偉大な君主にして，正義感に溢れ，当地には無比の主人を亡くした庶民も恭しい敬意を彼の亡骸に表しました。サレルノの庶民にとっては，その地の権力を高めた創始者でした。そして恐らく，その葬送儀式は，パオロ・ディアコノ以下モンテカッシーノの僧院の僧たちによって公式に執り行なわれたでしょう[12)]。では，そんな中で，アデルペルガはいったいどのような感情の起伏をもっていたのでしょうか。その情況の一例をメモリ・アピチェッラ女史の説明から生々しく振り返っておきたいと思います。

「芳香と亡骸との間で，アデルペルガは言葉以上に悲壮感を漂わせ，遠くに去っていった息子のもとに，死という残酷な別離にあった息子のもとに，そして人々の深い悲しみの中に置かれた花婿のもとに赴きました。アレーキは，若くして逝ってしまった夫であり，父親としてもとても情け深い父親であり，政治家としても才能に長けていた人物でした。聖堂での葬送儀式の最後に，彼女は精も根も尽き果ててしまいました。絶望の淵に立って，宮廷の部屋から部屋へと一人で回想に耽りたくなり，ディアコノに教示された文言を読み直したかったのでしょう。そしてバルコニーに姿を見せたときは，ほとんど日没でした。その消え入る寸前の太陽は，いつも以上に赤く，涙にくれた瞼を盲目にするほどで，目の前の海，沿岸，空を眺めながら，自らの少女時代の端々が走馬燈のように巡ってきました。それと同時に，彼女は安全で幸福だったこの地を愛していることをじわじわと感じてきました。しかし，夕闇が迫ってくるとともに，気持ちの翳りが強い精神そのものさえもうすらぼんやりとさせていきました。ただ，気を失うまでには至りませんでした。ただ，将来，すなわち家族の将来，人々の将来，この第二の故郷サレルノの将来を前にして，茫然自失するくらいの驚愕が目くらましのように巡ってきました。そして，両腕にアデルジーザとテオデラーダの二人の娘をきつく抱きしめ，冷たく悲しい婚姻の中で常々子供たちを同伴していました。そんな中で，ほとんど奇跡とも思えるほどに，彼女には激しく血が煮えたぎり，すぐに将来に山積する問題を解決すべく，聖リベラトーレの山頂に隠遁することを告げました」[13)]，というふうに描写しています。ともかく，一つの国家を統治することの重圧に，いかに耐えていくのかが大切なことだったことは事実でしょうし，それを乗り越えない限り人々の上に立つことはむずかしいものだったことは理解できます。そこには，王国の統治，外国との折衝，サレルノ医学学校の体制などが含まれていたことでしょう。

さて，ここでもう一つ，デ・レンツィの文言を簡潔に引用しておきたいと思います。アレーキが抱いたサレルノ医学学校の構想についてのものです。彼は「物惜しみなど全くない王は，公的にも法にも医学学校に帰した最初の人物だった。すなわち，その学校に特権を持たせ，宮廷の中にその学校事務所を設け

させた」と確言しています[14)]。この医学学校の命運は，のちにサレルノの地中海世界での立場を確固たるものにするだけの価値がありました。これがのちのちまでサレルノの息吹を鼓舞できる唯一の道だったのかもしれません。

では，アデルペルガは彼の死後，どのように対処していったのでしょうか。彼女は彼の重層的な考えに続いて，眠りが彼女に安心をもたらさない情況の中で，眠れない非常に高ぶった夜を過ごしたことでしょう。そしてその翌日に，行動あるのみではないかという結論に達した可能性が高いと思われます。もうディアコノは出発しましたが，彼はそのさいに今一度彼女にこれからの行動についての刺激を与えていったことでしょう。アクィスグラーナ（現在のアーヘン）で皮相的には傷心の日々を送っていたグリモアルドは，シャルルマーニュに囚われの身でしたが，南イタリアへの帰還をにおわせられていました。アデルペルガはその息子についても考えなければなりませんでした。

2．アレーキの葬送とアデルペルガの孤独

アレーキはともかく，758年から787年までの29年と6ヶ月にわたって治世を行ない，アデルペルガとの間にロムアルド，グリモアルド，ジジフォ，アデルジーザ，テオデラーダの三男二女に恵まれました。そして，この長い治世の間に，南イタリアの地中海における立場を明確にしていきました。その治世を実際に後継したのがアデルペルガでした。この二人の治世がサレルノの基盤を築いたといっても過言ではありません。それは単なるサレルノの地理的な位置だけではなく，その地にアデルペルガが北イタリアでの生活を二重写しできたことが大きな影響を与えていたといえるでしょう。アデルペルガに尽くしたアレーキも立派でしたが，結果的にはそれに応えたアデルペルガも人間として光彩を放っています。そしてそのような教育を受けていたアデルペルガ一族の教養豊かな部分はこの中世初期にあって特質されるところではないでしょうか。

敬虔なアデルペルガにとって，自然の兆候が大きな予兆になることは普通に受け入れられてきたことでした。宗教上の祈り，黙想，静寂は，彼女の心を静め，気持ちを回復させ，彼女の意志を強固にさせたことは事実でしょう。また，

日常的に聖職者と出会うことは，彼女の精神性をさらに強固していったことでしょう。その彼女のもつ敬虔さと医学への関心が聖職者を通して結びつきました。すなわち，教養豊かなコズモCosmo神父は，医術に秀でており，薬草や薬用療法の専門家でもありました。彼の広大な菜園は，岩場を切り拓き，小さな階段状台地を幾重にも配置しており，傾斜地に沿って下に降りていき，それぞれに変化をつけた植物や貴重な花々で満ちていました。過敏な芳香植物はここで栽培され，その香りが山頂からの一陣の風によってもたらされ，その風の一吹きが切り崩した斜面を滑っていきました。岩場から健康によい植物が出てくることはよく知られていました。そしてそれはとりわけサレルノの知識人によって求められていました。そんな中で，コズモ神父は薬草採集の分野では非常にまれな目利きのできる人物でした。このような神聖で，健康的で，学問的な環境の中で，アデルペルガは確かに疲労困憊していた体調であったとしても，内外の閉塞的な状況に晒されていたとき，そしてそれがどれほど厳しい情況のもとにあったとしても，彼女に重責の一切合財がかかっていたのも周知のところです。いずれにしても，彼女はアレーキの遺した事業をやりきっていかなければならない使命があったはずです。アレーキの高潔な精神性は，当然のことながら彼女の中で育まれ続けていました。彼が蒔いた種をを彼女が受け継いで耕すということになり，その地で生活する人々のためにも成し遂げなければならない使命感を帯びていきました。聖リベラトーレからの下山に際して，彼女は自らが今何をしなければならないのかを再確認することのできる場をもちました。そしてまず，ディアコノによって奉じられたアレーキの墓碑銘を，モンテカッシーノから運んできて，富裕層から貧困層に至るまでが参集していた聖堂の中で，ディアコノの声が音楽のように，その句を詠じて流れてきました[16)]。ディアコノは，その泣きくれている人々の中には，アプーリア，カラブリア，ブルガリア，カンパーニア，ウンブリアの人々を含んでいることを認めています。また，そこには中北部イタリアからの氏族だけでなく，ドナウ川沿いの領域からやってきた氏族もいました。ヨーロッパのさまざまな地域から参集してきていました。ここに，アレーキという人物の人となりの一端を垣間見ること

ができます。

そしてアデルペルガは，その群衆の彼方で，愛と苦悩の燃えさかる感情によって啓発され，今まで以上に美しく，心を強固にしていきました。彼女の周りには，まだ若々しい娘たちがいました。そしてすでに亡くなった二人の息子たちの記憶から不安にも苛まれていました。しかし，その背後には彼女のもつ信仰心が支えていたことも事実でした[17)]。ここに，彼女の孤独さが見え隠れしていました。その孤独な寂寥感を，次へのステップにするだけの教養が彼女にありました。ここまで育んできた人生経験を，これからの治世の中で発揮していきました。

サレルノという町にとっても，恐らくはこの故人の意志を表現するために，彼の亡骸を保存することは非常な栄誉でした。それは787年の９月末のことでした。アデルペルガはもう今では普通のこととなっていた悲壮感でもって，ディアコノのモンテカッシーノへの出発を見送りました。ともかく，ディアコノは，この偉大な王がヨーロッパのあらゆるところで，そして教会で歌われる賛美歌で有名になっていったこと，そしてそれが彼女や彼女ののちの運命を考慮するだけでなく，モンテカッシーノで叙述し始めていた歴史とともにロンゴバルド族を不滅のものとして取り扱っていくことを勇気づけていました。そのディアコノの配慮で，心のうちには分別さと賢明さに基づいた今までのあらゆる助言や忠告の類いを含んで，治世を担当する女王の義務を自らに吸収するように勇敢に準備し始めました。こうした彼女の政治のおかげで，また彼女の外交努力のおかげで，788年１月22日に，カプアの人々から長老グレゴリオを長とする分離脱退の企てが生じましたが，それを水泡に帰すことができました[18)]。ここで，彼女の外交努力の一例を挙げておきましょう。同盟を申し出たフランク王国やビザンツ帝国の外交使節団を受け入れましたが，息子グリモアルドの摂政として単独で王国を統治することを決心しました。このグリモアルドは前述したように，シャルルマーニュの人質として故国を離れていましたが，金25000枚の支払いでサレルノに帰還し，人々の歓呼を受けていました。実際には，シャルルマーニュはグリモアルドにとって二番目の父親のような存在であ

り，たくさんの遺贈品とともに帰国を許され，若い王についていました[19]。アデルペルガの家族愛がここに感じ取られますが，当時の周囲の大国と渡り合う決心の中に，亡き夫アレーキの思いが込められていました。ただ当時の南イタリアという地域は，すでに地中海世界の主流からははずれていたことも忘れてはいけないところだと思います。だからこそ，彼女の対応には多少とも我を通すことのできる状況にあったといえます。アデルペルガの意志の強い，勇気ある性格は，彼女の生まれの高貴さや知性溢れる教養と結びついて，この国家を巧みに統治する才覚として認められるところです。ただ，彼女の取り巻きの忠誠心が彼女の統治を支えたことも事実です。彼女の唯一の政策は，息子グリモアルドの人質からの解放でしたが，その息子にはディアコノの哲学が少なからず影響を与えていました。グリモアルドにアレーキとアデルペルガの遺す道が示されていたのかもしれません。

3．グリモアルドの帰還

確かに，グリモアルドのアクィスグラーナ逗留は，一部には隠遁生活の苦さはありましたが，さほど悲惨なものではありませんでした。このアクィスグラーナは，モーサ川とライン川との間の丘陵に位置し，その周囲はよく灌漑された肥沃な田園地帯に覆われ，狩猟の獲物が多く，冬季にも元気回復を与える暖かい自然水源泉があったので，シャルルマーニュが切望していた拠点でした。いずれにしても，その地は古代ローマの軍事拠点であり，温泉と館が設置され，かなり遠い昔から諸王によって使用されていました。シャルルマーニュもよくそこに逗留し，自らの好んだスポーツ，すなわち水泳をしていました。だから，シャルルマーニュはそこに，ビザンツやローマの建築物と比べても遜色のない宮殿建設を始めることをもうすでに考えていたようでした。

グリモアルドは，自らの感性や知性の中で，この王に感服し，彼の教養の深さの真価が理解できるのにさほど時間がかかりませんでした。王もまた，この青年の同伴を歓迎していました。グリモアルドは気後れせずのびのびとした，さまざまな話し振りから個人的な怨恨をよく抑制することができる人物でし

た[20]。シャルルマーニュは彼の勇敢さと大胆さを見染めて，しばしば彼を水泳に招待し，いっしょに競泳することもありました。グリモアルドはその試合の中でハンディを与えていました。こんな状況の中で，アレーキの未亡人アデルペルガの懇願の書簡を持参したベネヴェントの要人の使節団を受け入れたとき，彼はその友人のような青年を解放することに同意しました。

『サレルノ年代記』は，随所でこの二人の間で展開された対話の全てを言及しています。例えば，父親の死の報告に関して，グリモアルドは，主人シャルルマーニュに関して，尊敬と敬意を込めた言葉で反抗していました。恐らくその前にパオロ・ディアコノの伝言を受け取っていたのか，あるいは青年の顔の中に叔母のデジデラータの在りし日の表現を彼に認めていたのか，今後の政治的動向を計算していたのか，いずれにしろ出発に同意していました。実際のところ，彼はベネヴェントがビザンツと危険な同盟を締結することを避けたかったし，彼の側からこの青年を通してfoedus（友好条約）[21]を結びたかったという意図が見て取れます。事実，グリモアルドが彼に忠誠を誓願すること，統治権の行方そしてベネヴェント公国の貨幣や公文書にシャルルマーニュの名を記すことを切望していました。そのうえに，グリモアルドはフランク王国の流行に従って髭や髪を切らなければならず，それを全ての臣民に義務づけなければなりませんでした。そして極めつけはサレルノ，コンツァやアチェレンツァの防壁を根底から切断しなければなりませんでした。否応なしに，フランク王国の中に組み込まれ，その中で埋没していくような運命を目の前にしていました。

788年5月に，グリモアルドは，シャルルマーニュから馬，使用人そしてたくさんの贈品を受け取ったのち，第二の父親であった彼のもとから暇乞いをしました。上述した約束事を一新しながらのことでした。南イタリアへの帰還の旅は，ベネヴェントやサレルノへの到着で，臣民から歓喜の歓迎を受けました[22]。サレルノでは，聖マリア・ジェニトリーチェの聖堂で，グリモアルドは父親や兄弟の墳墓の前で，観衆を打ちのめすほどの崇拝をもって，膝をつきました。アデルペルガはその姿を見て，茫然としました。その直後に，感動と幸福感が目元に蘇ってきました。あたかも夫アレーキが降臨したかのように思われまし

た。アレーキのもっていた戦略，祈祷などが蘇ってきました。

グリモアルドは即座に，長老会を召集し，彼らに人質解放に当たっての厳しい条件を白日のもとに晒しました。それこそがフランク王国とベネヴェント公国との間の平和継続を示さなければならない条件でした。そして髭や髪を切ることは，ロンゴバルドの人々にとって，男らしさの象徴でもあり，重度の心身障害にも比するものでした。その風貌は単に，臣民だけでなく，召使や捕虜にまで徹底されていました。だからこそ，シャルルマーニュは，フランク族的な風貌を模倣させることで，南イタリアに自らの威厳を行き渡らせよとしていたのかもしれません。渋々とその要求を受け入れた背景には，髭や髪はすぐに伸びてくるという確信にも似たものがあつたからでしょう。このような身体的特徴を排除することで，精神的に上位に立とうとする策略のようなものが蠢いていたのでしょう。

しかし，他の命令は，要塞の破壊でした。これは非常な議論が沸き起こり，サレルノを捨てて，ヴェトリの地域に別の町を建設するという決定をしない限り，その調停に大きな努力を要しました。いすせれにしても，グリモアルドは長老会にさほどの信頼を寄せられずに出て行かなければなりませんでした。そんな彼の中には，血筋がもつ自信，父親の記憶，生涯を賭して小ロンゴバルドを守り抜くための人生を犠牲にすることが燃えさかってきました。その後，すぐに母アデルペルガとの個人的な話し合いに臨んで，そこでは彼女の的を得た助言を受け，かなり洗練された抜け目のなさに基づき，両義的な計画を実行する決断力と決定力を確かめる機会になりました。母親はその他のことで助言したのは，シャルルマーニュへの古くからの憎悪を育むことでした。そしてそれには全く限界がありませんでした。受諾した命令に従順であることを誓い，それを実行に移す必要がありました。グリモアルドは，所領の中にある偽りの破壊を行なうために，土地所有者たちの分遣隊とともに出発しました。コンツァでは，町そのものが自然の防塁になっていたので，防壁を取り壊しました。次に，アチェレンツァでは防壁を取り壊し，近くの山上に新たな同名の町を建設しました。その町は以前の町よりも美しいものでした。その作業の最後までプ

ッリアに残り，カラブリアの領土を訪れました。その地でも手厚いもてなしとたくさんの贈物を受け取りました。サレルノに戻り，リリーノ（現在のイルノ）の丘陵の上の方から塔が多かったサレルノに軽く接していた海を眺望していました。近づくにつれて，父アレーキが築いていた防壁がだんだんとはっきりしてきました。そのとき，内面からの声がして，それはその美しい町を破壊しないように命じるものでした。また，ヴェトリには近づくことができず，通過することすらままならなかったのかもしれません。このように，ファウスティーノの東側防壁を壊さざるをえませんでした。この地域では，小さな防壁のほかに投石器が唯一の防御として残されていました。その後，さらなる防壁が必要だと思われていたサレルノの西側の防御のために，海からの攻撃に晒されていた地勢のゆえに，以前から存在していた防壁の前に外側防壁を建設するだけでした。このような新たな地域は，都市建設の第二期に人口が増加していったところです[23)]。

ともかく，グリモアルドの治世初期は，その背後に自国の防御を巧みに隠していたとしても，シャルルマーニュへの恭しい敬意に特徴づけられます。しかしながら，その背後にあった企みは叔父アデルキが788年にカラブリアに上陸したことに始まると考えられます。叔父には，いずれにしても，大ロンゴバルドLongobardia maior回復の最後の絶望的な試みを実行したかったということでしょう。こんな情況にあっても，グリモアルドはシャルルマーニュと交わしたfoedusに忠実でした。だから，彼はフランク王国とともにスポレート公国を加えて，アデルキとビザンツの勢力に対峙しました。ただ，こうした戦争モードの部分に関しては，いかなる史料の中にもアデルペルガの立場がどうであったのか，という記述は一切出てきません。アデルペルガが平和，静穏の象徴として善政を施した部分でのみ叙述されているところに，彼女の真骨頂が見えてきます。前述した『サレルノ年代記』にも全くその叙述は見られません。

むすびにかえて

このような出来事が生じたのち，グリモアルドは父アレーキの自主独立の精

神そのものを体現しながら，統治し始めていきました。アデルペルガの実際の統治という点では，短時日の感は否めませんが，その影響力は少なからず大きいものがあったという事実は見て取れます。南イタリアでの彼女の影響力は，大きいものだったということを理解できるはずです。夫アレーキそして息子グリモアルドを通して，彼女の精神性が昇華していったともいえるのではないでしょうか。すなわち，家族の中でも彼女の立場はことさら大きいものがあったことも否めません。このように見てくると，アデルペルガの存在そのものが南イタリアの地中海世界における自立的な立場を醸し出すきっかけになったのかもしれません。ロンゴバルド族の真の末裔としての自覚がそうさせたのでしょうか，あるいは南イタリアという土地柄が彼女の精神性と相俟って，このような立場を貫かせることになったのでしょうか。当時の地中海世界の歴史の中でも，かなり特異な存在であったことは周知の通りです。

いずれにしろ，この時期にアデルペルガは，息子グリモアルドのそばで，政治的な「組織作りの裏方」としてのみ存在していたわけではありませんでした。夫アレーキとともに以前にすでに開始していた建設作業を継続していました。聖クリサンテと聖ダリアという二つの古いバジリウス修道院の修復と拡大のあと，聖ベネデット僧院の建設を続けました[24)]。

アデルペルガの事業にとって，僧院はその規模において大胆なものでした。つまり，大きな宿泊施設，クローク，作業場そして薬草作業場や医務室，図書館を備えていました[25)]。そしてそのほかにも，聖ジョルジョの僧院がアデルペルガによって修復されていました。その僧院は同名の古い教会構造物の上に建設され，王宮の基本的な構造物に隣接していました。ここで，アデルペルガは遠くブレッシャから僧院長である姉の許しを得て，聖サルヴァトーレの僧侶の一団を受け入れていた節があります。また，聖ジョルジョ僧院の庭園では，薬草が生き生きと栽培されていたことが知られています。こうした僧院の中から最初の医学学校の基礎が構成されていたことは，その当時の情況を鑑みれば一目瞭然です。そしてその発展はアデルベルガが推進した事業によるところが大きいといえます[26)]。

さて，801年から802年にかけて，フランク王国はキエーティChietiを滅ぼし，オルトーナOrtonaやルチェーラLuceraにまで達してきました。しかし，グリモアルドがそれを食い止めました。エルケンペルトErchemperto[27]は，ノチェーラにフランク王国の攻囲を言及していますが，そのノチェーラNoceraは恐らく806年頃にグリモアルドによってすぐに解放されました。フランク王国は幾度となく，ベネヴェント公国を攻撃しましたが，退却を余儀なくされていました。あるときは，ペストの流行によっていました。シャルルマーニュの息子ピピンとグリモアルドは局地戦を継続していました。前者が大部隊とともに攻撃をしかけると，後者が別の防御壁を築いて抵抗を増すという具合でした[28]。

こうした膠着状態は，808年にグリモアルドが42歳の若さで他界するまで続きました。その墓碑銘には，「イタリキ，ローマ，イリュリア，ヘブライ，アフリカ，そしてギリシアの人々」が彼の死を悲しんだと刻まれています。そして大聖堂の中のアレーキとロムアルドの棺のそばに葬られました[29]。

アデルペルガの業績そのものに関しては，さまざまな憶測が加味されてきますが，その憶測を覆すほどの史料は存在していませんし，それほど混沌とした時代が背景をなしています。それにもまして，アデルペルガを待望する考えが根強く，この地域に残っていることがさまざまな憶測を呼び込んでくる大きな原因になっているのは確かです。しかし，その憶測の向こうには，アデルペルガが善政をなして，君臨していたことを彷彿とさせていることも事実ではないかと思います。彼女の存在感は確かに大きなものがあります。だからこそ，その当時が心地よく振り返られるのだと感じます。

最後に，アデルペルガの名を冠した通りがサレルノに現存しています。そのことに関して，サレルノの高校生が学ぶ教科書の中に記事があります。それを意訳して，結びにかえておきたいと思います[30]。「それはVia delle BotteghelleからLargo S.Pietro a Corteに至るRione Barbutiにある小路の名前［テキストではAdelbergaになっている］になっています。歴史上の人物の名前が通りの名前につけられることがよくあります。しかし，このアデルベルガの場合捨て去られ，無名に近い小路に名づけられています。サレルノの最初の女王，デジ

デーリオ王の娘，サレルノの最初の王アレーキ２世の妻アデルペルガに奉じられるにしては悲哀を籠めています。彼女は善徳を施し，公国行政にも個人的業績を遺した女性でした。夫アレーキ２世の没後，シャルルマーニュに忠誠を示す使節を派遣しました。それと同時に，息子グリモアルドを，父王の玉座を後継させるために，人質から解放するように求めました。シャルルマーニュはそのさい，サレルノに対して都市存続の条件を提示すべく，信頼できる人物を派遣しました。アデルペルガは厚遇してその人々を宮廷に招じ入れましたが，まさにそのときサレルノの港にビザンツ帝国の使節団がやってきました。まさに王との対話を求めてきたようでした。女王はその使節団になかなか上陸を許可しませんでした。それどころか，自分が外出しているふりをし，アグロポリの方へ向かわせました。それから陸路サレルノへと導きました。実際にはシャルルマーニュの使節がもう出発してしまったあとに彼らは入ってきました。アデルペルガは独自の文化を保っていませんでしたが，芸術や教養をよく好んでいました。だから，彼女は自らの宮廷に当時の著名な人物や教養豊かな人物を招きました。そして芸術作品を創造することに腐心していました。その中には，王宮，宮廷の教会“in honorem beatorum Petri et Pauli”，恐らくは聖ベネデットや聖ジョルジョの僧院あるいは修道院がありました。また，医学学校は女王の色心の支えでもありました。だからこそ，パオロ・ディアコノがアレーキ２世に捧げた頌歌の一部はアデルペルガにも当て嵌まるものでした。すなわち，“Nostrae aetatis solus paene principum sapientae palmam tenet.”です。」ここに，アデルペルガの人生の凝縮があるように思われて仕方がありません。

註

1）Memoli Apicella,D., Adelperga, una principessa longobarda a Salerno, Salerno, 1993, pag.35: Elegantiae tuae studiis semper fautor extiti.　ただ，改訂版（2004年）では，この部分が削除されている。恐らくは，女史の考えの中に何らかの疑義が生じた可能性があるが，ここではその当初の女史の考え方を重視しておきたい。

2）Memoli Apicella, op.cit., pag.36には，“le nuove emissioni furono un'imitazione di

alta qualità del solido e del tremise, che appartenevano al sistema monetale bizantino" とあるように，ビザンツの貨幣にその基本を置いていた。

3）拙稿，『アデルペルガ，中世都市サレルノのロンゴバルド王朝の女王の誕生から青春時代にかけて』，創価女子短期大学紀要　第36号，2006年，62頁。

4）Carucci,A., ed. & trad., Chronicon Salernitanum, Salerno, 1988, pp.56-7: chiara nel mondo, precelsa, preclarissima, abbondante di ricchezze e di vivande. Cf. Memoli Apicella, op.cit., pagg.36-7.

5）ここで説明した以外にも，Leonardi,C. & Cassenelli,R., "Paolo Diacono e la civiltà altomedioevale", Paolo Diacono, Storia dei Longobardi, Milano, 1985, pag.20; Delogu,P., Mito di una città meridionale, Napoli, 1977, pagg.41; Gatta,C., Memoire topogr. della Lucania, Napoli, 1782, pag.383; Gregorovius,F., Storia della città di Roma, vol.1, Torino, 1973, pag.621; Ughelli,N., Italia Sacra, X, coll.420-432, Venezia, 1717-1722, spec.VII, coll.353; Della Porta,A., Cava Sacra, Cava de' Tirreni, 1965, pagg.331; Lepore,C., "Monasticon Beneventanum", Studi beneventani 6, 1995, pag.139 n.471などに当時の情況を説明する糸口が隠されている。Cf.Memoli Apicella, op.cit., riv.ed., 2004, pagg.92-8.

6）クラニオClanio，すなわち現在のレージ・ラーンニRegi LagniとパトリアPatriaの湖との間，そしてカンチェッロCancelloとノラNoraとの間の地域だと考えられる。

7）Acocella,N., Salerno medioevale e altri saggi, Napoli, 1971, pag.503.

8）Carucci, op.cit., pag.42.

9）Carucci, op.cit., pag.50: abbiamo visto non come avevamo sentito dire, perché abbiamo visto molto di più di quanto prima avevamo ascoltato.

10）Ibid.: abitacula servorum、すなわち執事ないしは家内奴隷がそこに仕えていた。そしてその建物はアーチで装飾され，海に面して建てられていた。Cf.Memoli Apicella, op.cit., pag.43.

11）Ibid.　そのディアコノの文節というのは，恐らくはギリシア神話上のニンフの一人カルメに関するもので，アレーキによってサレルノに建立された城砦のためにかかれたものではないかと考えられる。Memoli Apicella女史（op.cit., pag.43）によれば，"Aemula Romuleis consurgunt moenia temples/ampla procul fessis visenda per aequora nautis…"，すなわち「古代ローマの神殿に対抗するような側壁が荘厳に屹立し，疲れ切った船乗りたちが海の広がりを遠方から眺めることができる」とあり，さらに "tam corpore pulcher, pectore quamque magis virtute insignis et armis"，すなわち「その美しい肉体もさることながら，精神の素晴らしさは，善徳や武器をそこに刻んでいた」，"pater patriae, lux omne decusque

suorum"，すなわち「国父であり，その光明と品格が」といったような文言が取り沙汰されるであろう。Cf. Acocella, op.cit., pagg.530-1.

12) これらの文節は，現在のサレルノの感覚的な発想を伴なったメモリ・アピチェッラ女史のアレーキ葬送の考えに基づいているが，それに近いものが考えられる。Memoli Apicella, op.cit., pagg.43-4. 現在まで息吹いているさまざまな社会現象と重ね合わせていけば，自ずとこのような見方になっていくであろう。

13) Memoli Apicella, op.cit., pag.44. 歴史的事実というよりも，むしろ現在からの仮想を込めているけれども，そこに当時の情況が生々しく描写されている。そして多少とも，この描写に近いことが考えられる。

14) De Renzi,S., Storia documentata della Scuola medica di Salerno, Milano, 1967, pag.XXIII. Cf. Sinno,A., Regimen sanitatis, flos medicinale scholae Salerni, Milano, 1987, pagg.XX-XXXVII; Capparoni,P., Magistri salernitani nondum cogniti, terni, 1924, pagg.8-14; Paesano,G., Memorie storiche per servire alla storia della Chiesa Salernitana, Salerno, 1852, tom.1, pag.85; Gay,G., L'Italia Meridionale e l'Impero Bizantino, Firenze, 1917, pag.255; Gregorovius, Storia della città di Roma nel Medio Evo, Roma, 1900, vol.1, pag.621.

15) いずれにしても，このようなアレーキ治世の概観は，あちこちに見られるが，その代表的な文献を示しておきたい。それは，Gallo,I & Troisi,L., Salerno, profilo storico-cronologico, Salerno, 1998, passim; Carrozzo,T., Salerno, racconto di una città, 2003, pagg.31-5.などに見られるが，とりわけ前者が出版されてのち，サレルノではサレルノ地域史が続々と出版されている。

16) それは，つぎのようなものだったと考えられます。

Lugentum lacrimis populorum roscida tellus
principis haec magni nobile corpus habet…
[この地は，涙にくれる人々の涙の滴に濡れて
偉大な王の輝かしい亡骸を収容する]

というふうに出てきます。Cf.Memoli Apicella, op.cit., pag.47.

17) ここで，Memoli Apicella女史（op.cit., pag.48）は，つぎの一節を持ち出している。

O regina potens, Virgo genitrixque Creantis
prosit ei huic sacro membra dedisse lari
[おお，力をもった女王，神の娘で母であり，
この聖地に彼女の子息を迎え入れるのは神にも有益だ]

Cf. Acocella, op.cit., pagg.532-4.

18) Cilento,N., Le origini della Signoria capuana nella Longobardia Minore, Roma,

1966, pag.77.

19) Carrozzo, op.cit., pag.32.

20) Carucci, op.cit., passim. 因みに，その『サレルノ年代記』の初め（pagg.1-2）には，フランク王国とベネヴェント公国の歴代の王とその治世年数が挙げられている。その中に，アレーキは29年５ヶ月の在位で，グリモアルドは在位18年とある。

21) Acocella, op.cit., pag.496. この言葉に関しては，Hellegouarc'h,J., Le vocabulaire latin des relations et des parties politiques sous la République, Paris, 1972.を参照せよ。古代以来続いている，このような言葉の概念と発展について，稿を改めて熟考したい。

22) Chronicon salernirtanum, pagg.53ff.. ただ，いわゆる『サレルノ年代記』という史料そのものについては，稿を改めて見ていきたい。当稿では，以下，この年代記の再構成が中心になっている。

23) Memoli Apicella, op.cit., pag.59: inter murum et muricinum. さらにそこでは，グリモアルドの治世であるということを強調するように，貨幣や公文書にも“Dominus Carolus Rex”という刻印がなされた。これからも見て取れるように，シャルルマーニュへの思いが汲み取れる。とともに，彼の影響を捨てることができなかったのも事実です。

24) その古いバジリウス修道院はのちに“iuxta muros civitatis Salernitanae”になった。そして聖ベネデット僧院は，コルテに聖ピエトロ寺院建立後，アレーキによって建設された。元来聖マリアと聖ベネデットと称せられ，サレルノ東方壁付近に，“intus anc salernitanam civitatem ad ortum magnum”として配置されていた。

25) Cf.Memoli Apicella, op.cit., pag.62. いずれにしても，ここに女王が立ち止まることは可能性として残っていたはずであり，残念ながら，今日ではその遺失は計り知れないものがある。ただ，聖ジョルジョの僧院に関しては，Parisse,M., “Des prieurès de femmes”, Le Maitre,L., ed., Prieurs et prieurès dans l'Occident medieval, Genève, 1987, pag.116には，“per l'originaria e prevalente connotazione nobiliare degli insediamenti femminili.”とある。また，この当時アデルベルガがビザンツに対してかなり神経質になっていた可能性を，Cilento,N., Pluralismo ed unità del Medioevo cassinese（sec.IX - XII）, Montecassino, 1998, pag.97に，“sensibile agli influssi della civiltà bizantina”と示唆している。Cf.Fornasaro,F., “Quali cure al tempo dei Longobardi meridionali”, Quaderni cividalesi 18, ser.III, Cividale, 1991, pagg.20-1.

26) Cf. ibid. そこで，メモリ・アピチェッラ女史は一つの可能性として，“Sarebbe molto utile conoscere i rapporti intercorrenti tra costei e i suoi collaborator: i

gasindi, i gastaldi, i servi, e, ancora di più, il suo popolo, un popolo variegato per cultura longobarda, greca, romana, italic, e ancora larvatamente microasiatica ed ebraica." というふうに，当時の地中海世界，とりわけイタリア半島を中心とした地域や東地中海との交流の有無を示唆している。

27) Erchemperto, Storia dei Longobardi, sec.IX, Salerno-Roma, 1995 (I.T. Carucci,A.) , 2 voll..

28) グリモアルドのピピンに対する返答は非常に寓意性の強いもので，「私は貴族で，開放的な両親のもとに生まれ，神の助けのもと，これからもずっと自由であることを信じている」というものだった。Cf.Memoli Apicella, op.cit., pag.64.

29) Chronicon Salernitanum, cit., pag.67.

30) Carella,L., Salerno, attraverso il centro antico, toponomastica storica, Salerno, 1978, pag.19.